

# 中国語世界における経典

ジェローム・デュコール

中国語世界における仏教の同化は、世界にほとんど類をみない独特なインド文化を受容するという出来事であり、何をおいてもまずはインドのテキストを翻訳するところから始められた。西暦の初頭に中国に到着した最初の伝道師たちが目の当たりにしたのは、実に豊かな文書群を備えた、少なくともインド文明と同じくらいに洗練された中国文明であった。翻訳が企てられ着手されたが、この試みは最初から重大な問題にぶつかった。それは、中国語そのものの問題であった。表意文字であること、動詞の活用や語形変化もないと

いう点で、中国語は、完璧な文法をもつサンスクリットとは正反対の位置にある言語であった。さらに、中国哲学の概念とは明らかに異なる仏教概念を翻訳する難しさについては、言うまでもない。ここでは、インドの仏教テキストの中国語への移行が、仏典を大規模に翻訳したもう一つの主要な言語であるチベット語の場合とどれほど対極的であったかを強調できらるう。というのも、チベット語訳経典は、先行文献がまったくない状況で——その大部分は八世紀から九世紀にかけて——ゼロからつくられたからである。<sup>(1)</sup>

つまるところ、「(こうした事情を知らば)驚くに当たらないことであるが、中国語への翻訳は、八世紀以上の長きにわたって続けられることになった。さらに、例えば法華経の場合のように、何度も訳し直されたテキストもいくつかあった。<sup>(2)</sup>ここではその詳細について触れるゆとりはない。とはいえ、フランス語圏の読者には、ポール・ドミエヴィルの見事な研究書『古代インド(L'Inde classique)』を自由に手にすることができるといふ恩恵が与えられている。本書の中で、偉大な中国学者であったドミエヴィルは、中国經典の内容だけではなく、その翻訳の歴史についても述べている。<sup>(3)</sup>

### 「古訳」から「旧訳」「新訳」の時代へ

そこで、翻訳の歴史が大きく三つの時代に区分されていることを取り上げてみよう。第一は「古訳」の時代であり、訳語選択の際の模索が往々にしてみられた。例えば、仏教の基本目的である「悟り (bohi)」は、中国の基本原理である「道 (dao)」という言葉に訳されたが、混同を避けるため、「菩提 (miti)」という中国語へ

の「bohi」の音写が選択された場合もあった。この時代は、一七九九年に支婁迦讖しるかぜんによって訳された『般舟三昧経』——現前に諸仏を観ることができるとの瞑想(三昧)を説く経——にまでさかのぼる。この訳本は概して大乘仏教における最も早い時代の資料の一つといえる。またこの時代、二八六年に竺法護による法華経の訳が現れたが、この訳に不明瞭な点や誤訳がないとはいえなかった。

第二の時代は、鳩摩羅什によって幕が開いた「旧訳」時代である。鳩摩羅什は、今日まで使われている重要な訳本をいくつも訳した。その中には、四〇二年の『仏説阿弥陀経』や『維摩経』、もちろん四〇六年の『妙法蓮華経』などがある。また鳩摩羅什は、歴史上、彼が中国に導入したといわれている中観派の基本文献の訳者でもあった。彼によって、中国独自の各仏教学派発展の端緒が開かれたのである。鳩摩羅什は遠慮することなく、しばしば驚くほどの自由さで翻訳に当たった。その結果、彼の流麗な文体は、今なお、仏教の領域を超えて称賛されている。鳩摩羅什と同時代の人であり、

## No Image

鳩摩羅什の出身地・クチャの「亀茲石窟研究所」の前庭にある「若き羅什像」（像の高さ2m、台座は1m）。眼前のキジル千仏洞は中国新疆ウイグル自治区きっての仏教美術の宝庫であり、いにしへの亀茲国の仏教繁栄をしのばせる

ライヴァルでもあった仏陀跋陀羅（覺賢）は、『大般泥洹經』（四一七―四一八）と『華嚴經（六十華嚴）』（四一八―四二〇）を訳した。また、この時代には、パーリ經典の五部（五種の *Nikāya* ニカーヤ）集成された教説の内の最初の四部に相当する阿含（*Agama* アーガマ）伝承された教説）経典類が、サンスクリットから漢訳された。<sup>(4)</sup>

最後の第三の時代は、玄奘によって開幕した「新訳」の時代である。六四五年、インドへの長旅から帰ってきたこの中国人は、それまでの翻訳を専門的な語彙によつて体系的に改訂することに着手した。したがって、彼の訳は、殊にその厳密さにおいて名高い。その点でとりわけ有名なのが、極東において小乗についての真の百科事典とされている世親の『阿毘達磨俱舍論』の訳（六五一―六五四）である。さらに、玄奘による偉大なる編纂書『成唯識論』<sup>(5)</sup>の訳業（六五九―六六〇）もあり、これは中国における瑜伽行派（唯識派）にとつての基本文献となつている。玄奘の訳のいくつかは、それ以前の訳を押しつけた。例えば、有名な『般若心経』の場合は、鳩摩羅什訳ではなく、玄奘訳が今日でも読

誦されている。しかし、逆の現象もあり、玄奘が訳したとされる『称讚浄土仏撰受経（称讚浄土経）』が鳩摩羅什訳の『仏説阿弥陀経』に取って代わることは決してなかった。さらに言えば、続く八世紀には、極東における密教の基本的なテキストが翻訳された。例えば、善無畏による『大日経』（七二四―七二五）であり、また、不空による『金剛頂経』（七五三）や『理趣経（般若理趣経）』（七七二）などである。

最後に指摘しなければならないのは、これらの漢訳は、文官の事務局を通し、公的な体制で実施されたこと

## No Image

玄奘三蔵像（鎌倉時代・14世紀、絹本着色、135・1cm×59・9cm、重要文化財、東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives 禁複製。経典を積んだ笈を背負っている

いうことである。数十名の「翻訳者」の内の幾人かについては上に挙げたが、翻訳者も、通訳、訳文の推敲者、書記や校閲者など数多くいた他の官員たちを含む一連の鎖の一つの輪にすぎなかった。こうした背景を知れば、なぜ中国的な綿密なやり方で文献目録が作られ、それによって書誌的な詳細や年代学的な基礎指標——インドの原典にまでさかのぼるものもある——がわかるようにされたのかも理解できる。

### 「義に依りて語に依らざれ」など四基準

さらに付け加えると、中国語の仏教経典には、かなりの影響力をもった疑経がいくつか含まれている。<sup>(6)</sup>中でも『首楞嚴三昧経（首楞嚴経）』には、鳩摩羅什訳（四〇八）も含め数種の正式な訳があるが、最も広まったのは、主として中国唐時代の宰相・房融の協力によって七〇五年に訳されたものである。<sup>(7)</sup>また、『大乘起信論』も有名で素晴らしいものであるが、かなり前から、これがインドの学匠・馬鳴の著作であるとは認められなくなっている。それでも二つの「漢訳」が出ている。

これらの疑經が仏教聖典の中に含まれていることは、まったく驚くにはあたらない。なぜなら、仏教原典の解釈学における四基準<sup>(8)</sup>の一つが、言葉そのものよりも書かれている内容を優先する（義に依りて語に依らざれ）というものだったからである。

インドテキストの翻訳作業が終了したとき、中国語の仏教大藏經は、千六百以上の訳本を含み、それは二十世紀の初頭に日本で出版され最も普及している「大正新脩大藏經」に収められている。その中には、經(No.1,847)、密教(No.848-1420)、律(No.1421-1504)、論(No.1505-1692)などが収録されている。さらに、この大正大藏經には、インドのテキストに関する中国における注釈の大部分(No.1693-1850)や、中国や日本で書かれた仏教書、歴史的・書誌学的な研究書なども大量に含まれている。

伝統的に、經典は「十種法行」(書写、供養、流伝、諦聴、自読、憶持、広説、口誦、思惟、修行)の対象である。ここには、いわゆる宗教的修行だけでなく、經典の保存や伝播についての行も含まれている。なぜなら、仏教

徒たちは万人を救いたいと熟願したからである。そのため、中国の仏教徒たちは、唐朝以降、躊躇なく石碑に經典全体を彫り込んだり、木版による印刷法を開発したのである。<sup>(9)</sup>

また、經典に対する信仰的な側面は、回転式書架である「輪藏(転輪藏)」の製作によく表れている。これは經典の保存を目的とするとともに、それを回転させることによって功德を得るためのものである。チベットの有名な「マニ車(摩尼車)」に少し似ている。<sup>(10)</sup>

漢訳大藏經の初の完本は九七一年から九八三年にかけて刊行され、<sup>(11)</sup>引き続き、一八世紀までに別の八つの完本が刊行された。その中でも、一二三六年から一二五一年にかけて朝鮮の高麗王朝のもとで刊行された「高麗大藏經」は注目に値し、日本の大正大藏經の底本となった。その八万三千五百五十枚の版木は現在も韓国の海印寺に保存されている。最後に、近年出版された現代版の一つとして、二〇〇四年に北京で出版された「中華大藏經」がある。

- (1) (訳注) チベット文字ならびにチベット古典語そのものが、仏典翻訳を目的に、梵語系文字とサンスクリットを参照して、七世紀ごろつくられたとされる。
- (2) Robert, Jean-Noël : *Le Sutra du Lotus* (1997), pp. 14-21.
- (3) Demiéville, Paul: « Les sources chinoises »; *L'Inde classique: manuel des études indiennes*, t. 2 (1953), pp. 398-463. Rpr. Demiéville, Paul: *Choix d'études bouddhiques* (1973), pp. 157-222.
- (4) (訳注) 漢訳の阿含経には長・中・雑・増一の四阿含がある。『長阿含経』はパーリ語経典の「長部」(ディイガ・ニカーヤ)に対応し、『中阿含経』は「中部」(マツジマ・ニカーヤ)に、『雑阿含経』は「相應部」(サンユッタ・ニカーヤ)に、『増一阿含経』は「増支部」(アングッタラ・ニカーヤ)に、それぞれ対応する。パーリ語経典の五部にはその他に「小部(クッダカ・ニカーヤ)」があり、漢訳経典の中では対応するものが散在するが、大正大藏経では「本縁部」にほぼ相当する。
- (5) (訳注) 六世紀インドの護法の著作。世親の『唯識三十頌』への注釈書であり、護法の説をはじめとする諸学説を記した書であったが、玄奘が漢訳に際して護法の説を中心に編纂した。中国や日本の法相宗の基礎となった。
- (6) Kuo, Lying : « Sur les apocryphes bouddhiques chinois »; *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 87-2 (2000), pp. 677-705.
- (7) (訳注) 同経の巻頭の記述に拠れば、唐の神龍元年(七〇五年)、中インドの僧・般刺蜜帝の主導によって、広州の制旨寺で中国語に口訳し、これを弟子の房融が筆受し、烏菴国(ウジャールナ国)の僧・彌伽釋迦(中国名・雲峰)が訳語を整えたとされる。
- (8) (訳注) いわゆる「法四依」のこと。「依義不依語(義に依りて語に依らざれ)」「依智不依識(智に依りて識に依らざれ)」「依了義経不依不了義経(了義経に依りて不了義経に依らざれ)」「依法不依人(法に依りて人に依らざれ)」。
- (9) 一つの経典の表記の変化や多様性についての例としては、以下を参照。Ducor, Jérôme et Loveday, Helen : *Le Sutra des contemplations du Buddha Vie-infinité* (2011), pp. 78-85.
- (10) Loveday, Helen : « La bibliothèque tournante en Chine : quelques remarques sur son rôle et son évolution »; *T'oung Pao*, LXXXVI, 2 (2000), pp. 225-279.
- (訳注) 「輪藏」は寺院の経蔵の一種で、中心軸に沿って回転可能な書架が、八面等に張り合わせて設けられている。回転式なので経巻を閲覧するのに便利であるとともに、回転させるだけで一切経を読誦したのと同等の利益が得られるという。「マニ車」は転経器ともいう。円筒形で、側面にマントラを刻み、ロール状の

経文が中に納められている。マニ車を時計回りに回転させると、回転させた数だけ経を読誦したのと同じ功德があるとされている。

- (11) (訳注) 蜀版大藏経(北宋勅版大藏経)と呼ばれる。木版印刷技術は唐代に開発されたが、大藏経に使用したのは宋代になってからである。宋の太祖・太宗の両朝、蜀の益州(成都)で版木が彫られ、都の開封に建てられた太平興国寺の印経院で刷られた。卷子本の形式で毎行十四字詰であった。

Jerôme Ducor / パリの仏教学研究所 (Institut d'Etudes Bouddhiques) 総裁。スイスのローザンヌ大学とジュネーブ大学教員。ジュネーブ民族博物館 (Musée d'ethnographie de Genève) 東洋部長。ローザンヌ大学で仏教を学び始め、ジュネーブ大学で博士号を取得。西本願寺の教師の資格をもち、ジュネーブにあるスイス浄土真宗協会 (信楽寺 / Société bouddhique suisse Jodo-Shinshu) を拠点としている。